

『法然上人伝法絵』（『善導寺本』）の作者考 ——『法華滅罪寺縁起』と『栴葉和歌集』を手がかりに——

平間 尚子

はじめに

稿者は、拙稿「法然上人伝法絵の和歌と作者——『善導寺本』の表現を手がかりに——」において、『善導寺本』に描かれた阿闍梨尋玄が、『栴葉和歌集』に収載された詠者の一人である可能性について私見を述べたことがある。¹⁾

本稿では、その結論を踏まえたくうえで、湛空の事績について考察をすすめてみたい。まず、奈良での活躍が確認できる資料である『法華滅罪寺縁起』を取り上げ、そこに記された湛空の交流関係を明らかにしてみたい。

次に、『栴葉和歌集』に入集している聖信法師が湛空である可能性について、『栴葉和歌集』入集歌人の生没年や『古今著聞集』収載説話との関連から迫ってみたい。

一、『法華滅罪寺縁起』と湛空

細川涼一氏は、『感身学生記』に記された叡尊が法華寺で尼僧に授戒を行った際の注釈において、すでに湛空が円頓戒の授戒を行ったとして、『法華滅罪寺縁起』の一節を紹介し、また、湛空が授戒した法華寺の尼僧は、身分の高い宮家の子女や女房であることも指摘されている。²⁾

その指摘を踏まえ、法華滅罪寺（奈良県奈良市）の『法華滅罪寺縁起』（外題は「法花寺縁起」）の一節に目を転じてみたい。³⁾ 本来は一続きであるが、便宜上、二段落に分けて掲載する。

法華寺このたひ興行の次第事。当時の講堂に安置したてまつる十一面観音の像ハ本願のきさきの御作也。この像もと頂上に化仏おはします。住侶の比丘尼文篋房不審をなすところに。仁治四年六月十二日。同法の比丘尼釈念・慈念同時に夢みらく。十一面の御厨子よりひかりをはなたせ給と。時に長老慈善比丘

尼にむかひたてまつりて二人なからかたる。ふしきのおもひをなすところに。文篋房この像の御前にて観音講をおこなひて。像の御かを、見あげたてまつるに。かういろなる物二分はかり頂上においゝて給えり。きいの思いをなして人々ともによくく見たてまつれハ化仏にておはしませ給へり。後にはしろきいろにて御たけ九分ハかりにならせ給えり。御さうかふ具足し給て。諸人たうとみあひてふれさハリたてまつる。後に十一面の左右の御かをのかけにかくれ給えり。たひくかくれさせ給。その、ち随教沙弥尼に本願御託宣し給けり。この像むかし厨子にこめたてまつりしを。寺荒廢の、ち利生のためにいま、てひらかれたり。されとも寺すてにふるき覆せり。いまはとちこめてひらくへからすと。それよりしてその像を御厨子にこめたてまつりける。

京北嵯峨の湛空上人といふ人あり。当寺参詣のとき長老・慈念等の給ハく。この寺もと尼寺たり。男子と同居する事あるへからず。然に尼衆等一鉢そこむなしく。五衣中□たえたり。これによりて四壁おろそかにして門戸をとつるによしなし。ねかハくハ上人門・つかきをせられんや。上人かたく辞退せらるおりふし。上人礼盤のうへにて人に戒をさつけ給。三礼のほとに観音の御かをのいろをあかめてなミたくみ給とミれハ。御なみた御かをさきにつゆのことくか、り給えり。よの人ハミす。上人はかりみたてまつる。上人なミたにむせひてこゑをあけてよ、とそなき給ける。諸人あやしみたてまつる。上人礼盤を、りて門・つかきをうけとり給。このよしをなくくかた

寺を囲む四方の壁は粗末な状態で、門戸は閉じることができない状況になっていたので、湛空に、門と塀の修繕の願い出がされるが、湛空は、この申し出を断る。

そして、湛空は、礼盤にのぼり尼衆に戒を授けなされた。本尊に三礼をした時、観音菩薩の尊顔を眺めると、その目は涙ぐんでいるようにみえた。そのとき、涙が顔につゆのように流れた。このことは、他の人は見えず、湛空上人だけが見た光景であり、上人は啼泣された。上人の様子を、他の人は不思議に思っている、上人は、礼盤をおりて、門・築垣を修繕を引き受けることを、泣きながら語った。話を聴く者はみな感涙した。ついにその事業を終えて、尼寺となった。

『法華滅罪寺縁起』は、嘉元二年（一二〇四）十月、法華寺比丘尼円鏡により作られたものである。田中稔氏によれば、本縁起は、各段落の冒頭に「東大寺日記云」、「奈良記云」、「七大巡礼記云」「天神縁起云」と記され、それらの日記類を参考にしながら制作されたと考えられている。また同時に、現存しない「東大寺日記」「奈良記」の内容を示す貴重な資料でもあるとも指摘されている。

全体は、大きく十一段に分けられているが、寺の興隆を示す縁起の段に、湛空の尼僧への授戒が述べられていて注目される。この事実は、湛空が、嵯峨・二尊院での活動にとどまらず、奈良法華寺の尼僧に授戒できる立場の人物であり、ひいては円頓戒の戒師として名を馳せた人物であることが認められよう。

以上、湛空の奈良における活躍について、『法華滅罪寺縁起』に

り給。きく人感涙おさへかたし。つゐにそのこうを、えて尼寺となりけり。

ここに、引用した段落について、おおまかにあらすじを述べてみたい。

法華寺の講堂に安置されている十一面観音は、光明皇后の作である。仁治四年六月十二日に、この寺に住む比丘二人が同時に夢をみて、観音菩薩をおさめた厨子から光が放ったというこゝとを長老（慈善）に語った。そして不思議な思いでいる時に、文篋房がこの像の前で観音講をつとめていると、観音の顔を見ているとそこに化仏が現れて、（体は）白や黄色、背丈は九分になり、後には、観音菩薩の左右の顔の陰に隠れた。

その後、随教沙弥尼が、御託宣を受けたことには、「この観音像は昔、厨子にしまわれていたものであった。しかし、寺が荒廢した後に、衆生に利益を与えるためとして、いままで厨子は開かれていた。けれども、寺をもとの状態に戻しなさい。今、厨子は閉じて開くべきではない。」ということを告げられた。その時からこの像は、御厨子の中にいれてある。とあり、前半は、法華寺講堂の十一面観音菩薩像の由来が述べられる。そして、段落の後半は、湛空が法華寺を参詣した時のこと話題が及んでいる。

京の北嵯峨に湛空上人という人がいる。当寺に参詣された時、長老の慈善・慈念らが湛空におっしゃったことは、この寺は、もとは尼寺であり、男子と同居する事はあつてはならない。しかしながら、ここにいる尼衆たちでは資金がないため、

よつて、戒師として法華寺に向き、そこで門や築垣の修繕事業をも担ったとする記述を確認した。

次節では、歌僧としての側面に注目し、『栴葉和歌集』にみえる「聖信法師」が、正信房（聖信房）湛空である可能性について私見を述べてみたい。

二、「栴葉和歌集」詠者の特徴

『栴葉和歌集』に入集した歌人については、樋口芳麻呂氏の詳細な先行研究がある。氏は、作者名の明らかな人物三三五名について、僧階別・勅撰集入集別などに区分したうえで、出自の分かる詠者の内、七五％が「興福寺、東大寺の僧侶」であることを指摘されている。一方、入集数の少ない人物等には触れていないことから、検討の余地は、残されている。

樋口氏の論を受けて、『栴葉和歌集』の歌人に言及した先行研究には、久保田淳氏「栴葉和歌集」の歌人群「一班」、平野多恵氏「寺院文化圏の釈教歌——『栴葉和歌集』を中心に」、松本麻子氏「鎌倉初期の連歌好士と奈良」、加賀元子氏「栴葉和歌集覚書——宇智郡御霊社・良因寺・法隆寺蓮光院に関わつて」、築瀬一雄氏「栴葉和歌集と俊恵法師」の御論考がある。

なかでも、松本麻子氏は『栴葉和歌集』詠者であり、連歌を好んだとされる人物に焦点をあてた考察をされている。その一人に、「聖信」法師を取り上げて、『古今著聞集』(六四二話)に名前がみえるものの、

聖信房は生没年未詳、出自も明らかでない。しかし『夫木和歌抄』(四三六九、五一五九) 詞書によると、聖信房は仁安三年の「奈良歌合」に参加しているとされ、また『栴葉和歌集』(四五六) では「嘉応三年南都歌合」に参加していたことが知られる。聖信房は僅かに南都関係の歌合に名を残し、『栴葉和歌集』の作者であることから、奈良関係の僧であった可能性が高い。という言及に留まっている。¹⁰ 一方、田淵句美子氏は、歌僧としての二尊院湛空について詳細に論じるなかで、『古今著聞集』(六四二話) の「聖信房も、あるいは、聖信房とも呼ばれた湛空ではないかと思われるが、巻二・第七一話では湛空上人と呼ぶので断定はできない」と指摘されている。¹¹

こうした先行研究を念頭におきながら、稿者は先掲の拙稿で、『善導寺本』巻第二に、藤原隆信(戒心)と阿闍梨尋玄が、九条殿から退出する法然を見送る場面に描かれていることを指摘した。¹² さらに、阿闍梨尋玄と『栴葉和歌集』の尋玄が同一人物である可能性について言及したが、そのように考えると、『栴葉和歌集』の聖信法師が、正信房(聖信房) 湛空である可能性があるのではないか、と考えるに至った。

そこでまず、『栴葉和歌集』歌人について、『和歌文学大辞典』等で来歴の分かる人物を考証し、『栴葉和歌集』詠者の活躍年代を特定してみたい。そのうえで、『栴葉和歌集』詠者「聖信法師」が、同時代歌僧であるかについて、検討してみたい。

三、『栴葉和歌集』歌人一覧

つぎにあげる歌人一覧は、主に『和歌文学大辞典』、『新編国歌大観』、『国史大辞典』を適宜参照し、¹³ 生没年月日と来歴、勅撰集への入集と、交友関係に絞って列挙したものである。頁数は、『和歌文学大辞典』の頁数を掲載した。

なお、調査の過程に於いて『古今著聞集』に収載された人物が多数確認できたことから、『古今著聞集』と『栴葉和歌集』とが、密接な関係にあるということも考えられる。

そこで、来歴の末尾には、『古今著聞集』(日本古典文学大系、岩波書店、昭和四一年)に該当する人名の収載があれば、話数・タイトル・頁数を提示し、その冒頭には、『栴葉和歌集』の歌人において、何人目の収載であるかわかるように、番号とアスタリスク(*)を付した。ただし、『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、平成二六年)にその名前が見られない人物については、別の機会に考察したい。

ア

顕房〔平安時代中期歌人〕村上源氏。六条右大臣。長暦元(一〇三七)〜寛治八年(一一〇九四)年九月五日。『後拾遺集』以下の勅撰集に一四首入集。
『和歌文学大辞典』一三頁

イ

付の事」四四〇、四四一頁

卷第一六・五六三話「僧円慶鴨の毛を撈るに家隆詠歌の事」四四一頁

卷第一八・六三八話「九條前内大臣基家壬生隆家に雪を進むる事并びに二條定高に雪を贈る事」四八七頁

卷第一八・六三九話「壬生家隆所労に依りて蓮の実を食する事」四八七頁

卷第二〇・七〇四話「宮内卿家隆秘蔵の鴨萩葉を侍従隆祐に預くる事」五二九頁

卷第二〇・七〇五話「後久我太政大臣通光秘蔵の鴨おもながを壬生家隆に贈る事」五二九、五三〇頁

卷第二〇・七〇六話「二條中納言定高斑鳩を壬生家隆に贈るとて詠歌の事」五三〇頁

家基(いへもと)〔平安時代後期歌人〕花山院。法名は素覚。生没年未詳。『栴葉和歌集』の撰者素俊は曾孫。

承安二(一一七二)年『広田社歌合』が確認できる最後の事績。

『子載集』以下、八首入集。
四七頁

殷富門院大輔(いんぶもんいんだいぶ) ↓大輔殷富門院

〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕皇后宮大輔とも。

生年未詳〜正治二年(一一二〇)ころ没。後白河院皇女殷富門院亮子内親王に出仕。

家隆〔平安時代後期歌人・鎌倉時代歌人〕藤原。法号は仏性。

保元三(一一五八)〜嘉禎三(一二三三)年四月九日。(往生については、古今著聞集卷一三、四六九話。また、定家が撰した『新勅撰集』には、最多の四三首が入集した。)

*1 『古今著聞集』

卷第五・一六二話「いろは連歌に小侍従難句を附くる事并びに大進将監貞度が附句の事」一五二頁

卷第五・一九四話「壬生家隆臨終に七首の和歌を廻向の事」一七四頁

卷第五・二二二話「西行法師が御裳濯歌合并びに宮河歌合の事」一八五頁

卷第五・二一七話「京極定家土御門院の御製に合点の事并びに壬生家隆感涙の事」一八八、一八九頁

卷第五・二一八話「松殿僧正行意の夢に鬼神家隆の歌を詠吟の事」一九〇頁

卷第五・二一九話「陰明門院中宮の時六時の事を賜はりて定家家隆同じ古歌を撰ぶ事」一九〇頁

卷第五・二二四話「家隆七十七歳の七月に九條前内大臣良通の許に和歌を贈る事」一九二頁

卷第一三・四六六話「後京極良経曲水宴を催さんとし日不到らずして薨逝の事」三六九頁

卷第一三・四六九話「壬生二位家隆七首の和歌を詠じて往生の事付けたり侍従隆祐詠歌の事」三七一、三七二頁

卷第一六・五六二話「田舎侍為俊壬生二品家隆家の加冠に比興の名

建久三年の女院の出家に殉じて出家したか。歌林苑の催しに加わり、頼政・隆信・定家・小侍従・西行など多くの歌人との交流があった。『千載集』以下、六三首入集。

ウ

右衛門佐高松院（うゑもんすけ）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕生没年未詳。はじめ高松院、後に建春門院に出仕。元久二（一二一〇）年正月の朝覲行幸の後に後鳥羽院に献歌、この頃まで生存。『新古今集』以下に五首入集。

八二頁

*2 『古今著聞集』巻第五・一九五話「大納言宗家の室歌に依りて再び迎へらるる事」一七四頁

宇治前大僧正、覚忠〔平安時代後期歌人〕宇治大僧正・長谷大僧正とも。元永元（一一一八）→治承元年（一一七七）十月一六日。藤原忠通（法性寺殿）男。後白河上皇出家の戒師、近衛天皇他の護持僧を勤める。『千載集』以下に、一二首入集。忠通も『栴葉和歌集』入集。『栴葉和歌集』の特徴には、父子で入集する場合がある。一七四頁

*3 『古今著聞集』巻第七・二九八話「宗淳阿闍梨醍醐の桜会にて童に歌を送る事並びに中院僧正見物の事」一七六頁、巻第十八・六一八話「長谷前々大僧正俊恵法師と粽の歌を贈答の事」四七七頁

巻第十八・六二三話「法性寺忠通元三に皇嘉門院にして菓物を参る

カキノモトノマウチ君↓入磨

カ

覚延（かくえん）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕梢少将藤原公重の子。仁和寺阿闍梨。『千載集』以下、六首入集。

覚雅（かくが）〔平安時代後期歌人〕村上源氏。六条右大臣顕房息。寛治四年（一〇九〇）→久安二年（一一四六）八月一七日。一七三頁

覚弁（かくべん）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕藤原俊成男。興福寺別当権大僧正。

『栴葉集』に弟子範円が催した「菊苑庚申講会」の和歌があり、『千載集』『新古今集』に各一首入集。没後、子女たちは俊成・定家の計らいで出仕・出家、その一人に春華門院に仕えた後出家して法華寺長老となった聖恵房慈善がいる。一七五頁

兼直（かねなお）〔鎌倉時代歌人〕卜部。生没年未詳。文永三（一二六六）五月成立「続古今和歌集目録」では故者に入る。藤原顕氏、藤原秀能、素俊（橘家季）といった同時代歌人との交流が彼らの歌集等から知られる。宝治元（一二四七）頃、真観（光俊）勸進の『住吉社三十六首』や寛元四（一二四六）年『春日若宮社歌合』へ

事」四七九頁

工

恵慶（ゑぎやう／ゑけい）〔平安時代中期歌人〕出自未詳。播磨講師と称した（中古歌仙三十六人伝）。生没年未詳。正暦元（九九〇）年頃生存。僧侶歌人また旅の歌人として能因、西行の先蹤に位置づけられる存在である。『拾遺集』以下、五五首入集。一一一・一一二頁

越前嘉陽門院（ゑちぜん）〔鎌倉時代歌人〕生没年未詳。正治二（一二〇〇）に後鳥羽院に召されて院の女房となり、文暦二（一二三三）→嘉禎二（一二三六）年で嘉陽門院礼子（後鳥羽院皇女）の女房であった（新勅撰集・如願法師集）。隠岐の後鳥羽院に近仕する西蓮から都の氏久に送られた書状にも名前が見える。後嵯峨院歌壇の宝治二年（一二四八）『院御歌合』に詠進したが、和歌での最終事績。

『新古今集』以下、二六首入集。一一二・一一三頁

円経（ゑんきやう）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕承安二（一一七二）年→生没年未詳。興福寺僧。興福寺別当範玄の子。藤原為業（寂念）の孫。貞慶に法相・唯識を学ぶ。『栴葉和歌集』に「法印円経三十首歌」とある。『新勅撰集』に一首入集。一一六頁

の出詠が確認される。

『新勅撰集』以下、一首入集。二〇五頁。※素俊は、『栴葉和歌集』に十首入集。『古今著聞集』巻末説話に「にこりなき御代にあひ見る角田川すみける鳥の名を尋ねつつ」という彼の祝言詠が置かれる。

*4 『古今著聞集』巻第二〇・七二一話「或殿上人右府生泰頼方の進じたる都鳥を橘成季に預けらるる事」五三九→五四〇頁

キ

清輔（きよすけ）〔平安時代後期歌人〕藤原。通称は、三位大進。天仁元（一一〇八）→治承元（一一七七）年六月二十日。『千載集』以下の勅撰集に九五首入集。二六五頁

*5 『古今著聞集』巻第五・二〇三話「前大宮大進清輔和歌の尚齒会を行ふ事」一七八→一八一頁

巻第五・二〇四話「清輔所伝の人丸影の事」一八一、一八二頁

ク

黒主（くろぬし）〔平安時代前期歌人〕大友（伴）。生没年未詳。六歌仙の一人。

顕昭（けんせう）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人・歌学者〕生没年未詳。大治五（一一三〇）年ころの生まれ（久曾神説）。承元三（一一〇九）年「長尾社歌合」出詠（夫木抄）

三二八頁

ケ

〔玄覺〕(げんかく)〔鎌倉時代歌人・歌学者〕生没年未詳。叡山僧か。初見は建長七年(一二五五)の『顕朝卿家統千首』(散佚。『夫木抄』所引)

元応二年(一三二〇)の『八月十五夜同詠月十首和歌』の自筆懷紙が記録の最後である。
三二〇頁

〔顕照〕(けんせう)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人・歌学者〕

生没年未詳。大治五年(一一三〇)ころの生まれか。

承元元年(一二〇七)『門葉集』を信じれば建暦元年(一二一一)生存。
三二八頁

コ

〔皇嘉門院〕(こうかもんいん)〔平安時代後期歌人〕保安三年(一一二二)、養和元年(一一八一)二月五日。弟に九条家の祖兼実がいる。
三四三頁

*6『古今著聞集』卷第十八・六二三話「法性寺忠通元三に皇嘉門院にして菓物を参る事」四七九頁

〔小宰相承明門院〕(こさいしょう)〔鎌倉時代歌人〕土御門小宰相とも。正治二年(一二〇〇)ころ誕生か。文永三年(一二六六)以降、同十年(一二七三)以前の没。

はじめ承明門院(後鳥羽院中宮在子)に仕え、その後、土御門院に仕えて寵愛を受けた(増鏡)。
三八五頁

*7『古今著聞集』卷第五・二二二話「西行法師が御裳濯歌合並びに宮河歌合の事」一八五―一八六頁

卷第八・三三二話「後嵯峨天皇某少将の妻を召す事並びに鳴門中将の事」二六〇―二六七頁

サ

〔宰相〕(善提院) (さいししょう)〔平安時代中期歌人〕大斎院選子内親王家の女房。

生没年や出自は未詳。『新勅撰集』に選子内親王との贈答歌二首が入集する。
四三八頁

〔讃岐〕(さぬき)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕二条院讃岐。永治元年(一一四二)―健保五年(一二二七)。建久年間(一一九〇)―一九九)には後鳥羽院中宮宜秋門院任子に仕えたが後に出家。
四六二頁

*8『古今著聞集』卷第五・一六七話「伊通公中納言に任せられず恨みに堪へずして辞職の事」一五五、一五六頁

〔実房〕(三条入道左大臣) (さねふさ)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕

久安三年(一一四七)―嘉禄元年(一二二五)八月十七日。三条入道左大臣と号す、法名静空。『千載集』以下の勅撰集に三十首入集。四七七頁

*9『古今著聞集』卷第三・一〇〇話「三條大臣実房内弁の時節会に先づ食を取り諸人之を倣ふ事」一一九頁

『古今著聞集』卷第五・一六六話「道因法師広田社の夢の告に依りて歌合の事並びに左大弁実綱述懐の事」一五四頁

〔実行〕(さねゆき)〔平安時代後期歌人〕

八条太政大臣。法名蓮覚。承暦四年(一〇八〇)―応保二年(一一六二)七月二八日。

『金葉集』以下、一三首入集。

*10『古今著聞集』卷第三・九六話「院の礼拝に八條太政大臣実行一拝再致の事」一一六頁

『古今著聞集』卷第五・一五四話「八條太政大臣実行齋宮と和歌贈答の事」一四七頁

卷第十四・四七七話「白河鳥羽兩院御同車にて白川の花御覧の事」三八〇、三八一頁

シ

〔成範〕(しげのり)〔平安時代後期歌人〕保延元年(一一三五)―文治三年(一一八七)三月一七日。桜町中納言と呼ばれる。藤原俊成と

親しく、隆信・清輔・顕昭・西行・小侍従らと交流があった。『千載集』以下、九勅撰集に一三首入集。
五一四頁

*11『古今著聞集』卷第四・一三〇「高倉院秀句の事」一三三頁

〔寂身〕(じゃくしん)〔鎌倉時代歌人〕能蓮法師男。建久二年(一一九一)ころの生まれ、建長三年(一二五二)以降の没。『新勅撰集』以下、勅撰集に六首入集。*『寂身法師集』あり。
五四〇頁

〔寂蓮〕(じゃくれん)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕

生年未詳だが保延五年(一一三九)頃と推定される。

建仁二年(一二〇二)七月二十日以前に没。醍醐寺阿闍梨俊海の男。叔父俊成の養子となる。承安二年(一一七二)頃出家。
五四二頁

*12『古今著聞集』卷第五・二二二話「西行法師が御裳濯歌合並びに宮河歌合の事」一八五、一八六頁

卷第十八・六三三話「暁行法師並びに寂蓮法師瓜の歌を詠む事」四八三頁

〔俊恵〕(しゅんゑ)〔平安時代後期歌人〕永久元年(一一一三)―建久五年(一一九四)以前。父の死後、東大寺の僧となる。京・白河に自房を設けたが、やがて歌林苑と称して、保元から歌人たちの集まる場となり、源頼政、藤原清輔、教長、加茂重保、鴨長明、登蓮、

道因、殷富門院大輔など、寿永頃まで僧俗、老若男女を問わぬ歌人たちが交遊した。
勅撰集に八十四首入集。

五六五頁

*13 『古今著聞集』巻第二・六〇話「澄憲法印祈雨の事」九六頁
巻第五・二〇四話「清輔所伝の人丸影の事」一八一、一八二頁
巻第五・二〇五話「賀茂神主重保尚齒会を行ふ事」一八二、一八三頁

巻第十八・六一八話「長谷前々大僧正俊恵法師と粽の歌を贈答の事」四七七頁

貞慶（ぢやうけい）〔鎌倉時代歌人〕久寿二年（一一五五）〜建暦三年（一二二三）
五七九頁

*14 『古今著聞集』巻第二・六一話「解脱房法文宗義を談ぜざる事」九六頁
巻第五・二二三話「解脱上人詠歌の事」一八六頁

聖信（——法師）『大辞典』なし
七九四頁

*15 『古今著聞集』巻第十八・六四二話「聖信房の弟子等荃立を煮るを見て其座の人連歌の事」四八八頁

定範（じょうはん）〔鎌倉時代歌人〕醍醐寺・東大寺僧。永万元年

*16 『古今著聞集』巻第十一・三八四話「紫宸殿賢聖障子並びに清凉殿等の障子画の事」三〇八〜三一〇頁

崇徳院↓崇徳天皇〔平安時代後期歌人〕元永二年（一一一九）〜長寛二年（一二六四）八月二六日。六六三頁

*17 『古今著聞集』巻第十七・五八四話「崇徳院白河僧正正増智を夢み給ひて後御不例の事」四五四、四五五頁

住吉大明神
六六六頁

*18 『古今著聞集』巻第五・一六五話「道因法師住吉社にて歌合の事」一五三頁

ソ

素覚↓家基（いへもと）〔平安時代後期歌人〕生没年未詳。法名素覚。『栴葉和歌集』の撰者素俊は、曾孫。

承安二年（一一七二）『広田社歌合』が確認される最後の事績。『千載集』以下の勅撰集に八首入集。
七〇一頁、四七頁。

素俊（そしゅん）〔鎌倉時代歌人〕花の下十念房。生没年未詳。
嘉禎三年（一二三三）、『栴葉和歌集』を編纂した。『新勅撰集』以下、二首入集。

『明月記』には『新勅撰集』入集を謝すために定家邸を訪れたとあ

（一一六五）〜嘉祿元年（一二三五）二月二五日、六一歳。
醍醐寺で叔父勝賢に顕密を学んだのち、東大寺に移り、伯父明遍の弟子となった。

健保元年（一二二三）一二月に東大寺別当となったが、承久三年（一二三二）にこれを辞して、醍醐寺座主となり、以降没時まで同寺三宝院に住した。東南院院主であった間に、宴信・聖玄・頼信らの僧を作者とする歌合を複数回催した。五九五頁

心円（しんえん）〔鎌倉時代歌人〕生没年未詳。藤原知家男。
※『統拾遺集』高野山あかつきをまつ鐘のおともいくよの霜にこゑふりぬらん（雑秋六四四）六一五頁

ス

季広（すゑひろ）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕生没年未詳。
天治末（一一二五）〜大治初（一二二六）年ころ生まれ。文治三年（一一八七）には生存。

父、季兼は皇嘉門院の家司として摂関家の家政に深く関与し、自身も仕える。
六四七頁

資季（すけすゑ）〔鎌倉時代歌人〕法名了心（信覚）。承元元年（一二〇七）〜正応二年（一二八九）一月二二日、八三歳。『新勅撰集』以下、三七首入集。
六五三頁

る（嘉禎元年三月二五日条）

七〇五頁

*19 『古今著聞集』巻第四・一三三「素俊法師が秀句の事」一三五頁

尊海（そんかい）〔鎌倉時代歌人〕生没年未詳。
文永三年（一二六六）生存。興福寺別当権僧正、定玄の男。『統後撰集』以下の四首入集。

寛元四年（一二四六）『春日若宮社歌合』への出詠や『人家集』の詞書から、真観（光俊）や宗尊親王との交流が認められる。

※真観（光俊）は、『栴葉和歌集』に詠。
七〇九頁

タ

高松宮（たかまつのみや）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕鳥羽院皇女。生没年未詳。

没後まもなく行能（治承三年、一一七九生）が追慕歌を詠んでいることから、建久期後半以降の没。※『宝物集』に二首入集。
七四〇頁

忠季（ただすゑ）〔平安時代後期歌人〕生没年未詳。久安二年（一一四六）までの履歴が知られる。
七五一頁

*20 『古今著聞集』巻第三・九九話「後白河院熊野詣の時紀伊国司

御前に松煙を積む事」一八八～一九九頁
なお、卷第三・一〇一話「中山太政大臣入道頼実徐目に管文の三の説を夜ごとに換へて取る事」の頭中将忠季朝臣（中山忠親の男）藤原忠季は、建久七年（一一九六）年一月二十日没）と同一人物であるかは、現段階では、未詳。

忠通（ただみち）〔平安時代後期歌人〕法性寺闍白。法名は円観。承徳元年（一一〇九七）～長寛二年（一一六四）二月一九日。

基実（近衛家祖）・基房・兼実（九条家祖）・慈円などの父。『金葉集』以下、〇〇首入集。七五六頁

*21『古今著聞集』卷第五・二九八話「法性寺忠通小筆を以て大字を書く事」二三三、二三四頁
卷第十四・四七七話「白河鳥羽兩院御同車にて白川の花御覧の事」三八〇、三八二頁

チ

朝恵（てうゑ）〔平安時代後期歌人〕興福寺僧。『栴葉和歌集』に一四首入る。八一三～四頁

澄憲（ちようけん）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕安居院法印。蓮行房。大治元年（一一二六）～建仁三年（一二〇三）八月六日
俊恵や加茂重保らと交わり、「和歌政所一品経供養表白」（澄憲作文

集所収）には俊恵の歌林苑歌会の様子や狂言綺語論による澄憲の和歌観が窺え注目される。『千載集』以下、三首入集。

*22『古今著聞集』卷第二・六〇話「澄憲法印祈雨の事」九六頁
卷第十二・四三二話「澄憲法印奈良坂の山賊を教化の事」三四二、三四三頁

重源（ちようげん）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕保安二年（一一二二）～建永元年（一二〇六）六月五日。房号は俊乗房、阿号は南無阿弥陀仏。

※高野山に籠もる重源を訪ねて詠んだ聖玄の和歌『栴葉和歌集』六一二がある。
※東大寺東南院における歌会を主催した定範は、重源から含阿弥陀仏の阿号を受けた。八一七頁

*23『古今著聞集』卷第一・二六話「俊乗房重源東大寺建立の願を發して大神宮に參籠の事」六五頁

ト

道助法親王（だうじよ）〔鎌倉時代歌人〕光台院御室。建久七年（一一九六）～宝治三年（一二四九）正月一六日、五四歳。
『新勅撰集』以下、三八首入集。八七一頁

俊綱（としつな）伏見修理大夫。長元元年（一一〇二八）～寛治八年

（一一〇九四）七月一四日。能因、範永、良暹、経信らとの交流がある。『後拾遺集』以下、一二首入集。八九二頁

*24『古今著聞集』卷第五・一八五話「田舎上りの兵士水上月の秀歌を詠ずる事並びに大宮先生義定が秀歌の事」一六九頁

俊成（しゆんせい）としなり）〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕御子左家と称す。永久二年（一一四四）～元久元年（一二〇四）十一月三十日、九十一歳。法名は釈阿、阿覚、澄鑿。『詞花集』以下、四一八首入集。五六七頁

*25『古今著聞集』卷第五・二二二話「西行法師が御裳濯歌合併びに宮河歌合の事」一八五、一八六頁

知家（ともいへ）〔鎌倉時代歌人〕寿永元年（一一八二）～正嘉二年（一二五八）十一月。

嘉禎四年（一二三八）、病により出家、法名は蓮性。
※母親の縁で、後鳥羽院と接近している
八九九頁

*26『古今著聞集』卷第五・二二二話「藤原知家の和歌叡感を蒙る事」一九一頁

ナ

業平（なりひら）〔平安時代後期歌人〕天長二年（八二五）～元慶四

年（八八〇）五月二八日。九三五頁

能因（のういん）〔平安時代中期歌人〕出家して、融因と名乗るが、能因に改めた。永延二年（九八八）～没年未詳。永承七年（一一〇五二）までの生存が認められる。『後拾遺集』以下、六五首入集。九五八頁

*27『古今著聞集』卷第五・一七一話「能因法師詠歌して祈雨の事並びに白河関の歌の事」一五八頁
卷第五・一七二話「待賢門院の女房加賀伏柴の秀歌を詠む事」一五九頁

信実（のぶざね）〔鎌倉時代歌人〕法名寂西。治承元年（一一七七）。文永三年（一二六六）生存。九六一頁

*28『古今著聞集』卷第十一・四〇一話「藤原信実後鳥羽院御幸の絵を画く（書く）事」三一九、三二〇頁
卷第十一・四〇四話「後堀河院の御時左京権大夫信実をして北面等の影を画かしめ給ふ事」三二一頁

範兼（のりかね・のりかぬ）〔平安時代後期歌人・歌学者〕嘉承二年（一一〇七）～長寛三年（一一六五）四月二六日。『千載集』以下、

二十首入集。
九六七頁

【教長】(のりなが)〔平安時代後期歌人〕

天仁二年(一一〇九)～没年未詳。治承四年(一一八〇)ころまで生存か。

九六九頁

*29『古今著聞集』巻第五・一六六「道因法師広田社の夢の告に依りて歌合の事並びに左大弁実綱述懐の事」一五四頁

ハ

【範玄】(はんげん)〔平安時代後期歌人・鎌倉時代歌人〕

保延三年(一一三七)～正治元年(一一九九)六月一日。藤原為業(寂念)の子。伊賀僧正。中山僧正とも。元興寺、興福寺、法隆寺などの別当をつとめ、当時の南都で大きな影響力を持った。後白河院との関りが深く、和歌においても、院の近臣である

親宗・親盛らとの歌会を行っている。教長・俊恵・顕昭・殷富門院大輔といった京都の有力歌人との交流もあり、京都・奈良の歌壇で活発に活動した。『千載集』以下、勅撰集に五首入集。(要確認)
九九三頁

ヒ

【肥後】(ひご)〔平安時代後期歌人・鎌倉時代歌人〕生没年未詳。

永久四年(一一一六)八月の『雲居寺結縁経後宴歌合』まで活動が

確認される。

『金葉集』以下の勅撰集に五一首入集。

九九九頁

【人麿】(ひとまろ)〔飛鳥時代以前万葉第二期歌人〕生没年未詳。

同時期に柿本氏から出た人物に佐留(媛)がいる。佐留は、和銅元年(七〇八)四月二十日に卒と『続日本紀』にある。一〇〇七頁

『古今著聞集』巻第五・一七八話「修理大夫顯季人丸影供を行う事」(二六二頁)には、「人丸影供」として、その名がみえる。

【広綱】(ひろつな)「散位源広綱朝臣歌合」長治元年(一一〇四)五月

に、源広綱が催した歌合。

四九六頁

ホ

【堀川院】〔平安時代後期歌人〕承暦三年(一〇七九)七月九日～嘉承

二年(一一〇七)七月九日。『金葉集』以下、九首入集。

一〇七六頁

*30『古今著聞集』巻第五・一四九話「民部卿泰憲白紙を置きて逐電の事並びに関白師実位署の事」一四四頁

ニ

【参内侍】(みかはのななし)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕藤原為

業(寂念)の女。生没年未詳。兄範玄の養女となったか。『千載集』

以下、一二首入集。一二二七頁

【通忠】(みちただ)〔鎌倉時代歌人〕建保四年(一二二六)～建長二年

(一二五〇)～二月二四日。『続後撰集』以下、勅撰集に七首入集。

一二三三頁

【通光】(みちてる／みちみつ)文治三年(一一八七)～宝治二年(一

二四八)正月一七日。

『新古今集』以下の勅撰集に五十首入集。一二三五頁

【光俊↓真観】(しんくわん)〔鎌倉時代歌人〕建仁三年(一二〇三)～

建治二年(一二七六)六月五日。俗名は葉室(藤原)光俊。最終官

位をもって右大弁入道と称される。

六一六頁

*31『古今著聞集』巻第五・二二九話「真観法師仙洞の御会を辞して一首の和歌を奉る事」一九四、一九五頁

七

【其俊】(もととし)〔平安時代後期歌人〕天喜四年(一〇六五)～永治

二年(一一四二)正月一六日(長秋記・台記)一一九五頁

【師光】(もろみつ)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕法名生蓮。生没年

未詳。天承元年(一一三一)～建仁三年(一二〇三)までは生存。

建久六年(一一九五)正月まで出家。

俊恵・隆信・頼政らを作者とする歌合・歌会を行った。『千載集』

以下の勅撰集に二七首入集。一二二〇頁

ユ

【行能】(ゆきよし)〔鎌倉時代歌人〕

法名寂能。治承三年(一一七九)～建長五年(一二五三)二月三

日。

仁治元年(一二四〇)出家。『新古今集』以下、四九首入集。

一二四一頁

*32『古今著聞集』巻第七・二九一話「法深房が持仏堂楽音寺の額の事」二三五～二三七頁

ヨ

【永縁】(やうえん)〔平安時代中・後期歌人〕

永承三年(一〇四八)～天治二年(一一二五)。興福寺で出家、清水

寺別当等を経て、興福寺別当権僧正になる。『金葉集』以下、二十

首入集。

一二四三頁

【良経】(よしつね／りやうけい)〔平安時代後期・鎌倉時代歌人〕

嘉応元年(一一六九)～元久三年(一二〇六)三月七日。

撰関家九条兼実の次男。慈田は叔父、後鳥羽院中宮任子は妹にあたる。

『千載集』以下の勅撰集に三二〇首入集。

一二五三頁

* 33 『古今著聞集』
卷第五・二二二話「西行法師が御裳濯歌合并びに宮河歌合の事」一八五、一八六頁
卷第十三・四六三話「後京極良経夢に冷泉内大臣良通と会ひ六韻の詩を和する事」三六八頁
卷第十三・四六四話「後京極良経故中宮権大夫家房の旧宅を過ぎ独吟の事」三六九頁
卷第十三・四六六話「後京極良経曲水宴を催さんとし日不到らずして薨逝」
菅退（刑部卿——卿）

頼輔（よりすけ）〔平安時代後期歌人〕天永三年（一一二二）～文治二年（一一八六）四月五日。安元（一一七五）以降は兼実家に入入りし、『兼実家歌合（安元元年十月）』に出詠。また後白河院に近侍し、『供花会書歌会』に参じた。
『千載集』以下の勅撰集に二八首入集。
一二六六頁

* 34 『古今著聞集』卷第十一・四一二話「安元御賀の時刑部卿頼輔賀茂神主家平に上鞠の故実を聴く事」三二九頁
卷第十一・四二三話「治承三年三月御方違の行幸に七條殿の御壺にて御鞠の事」三二九頁

頼長（よりなが）〔平安時代後期歌人〕通称、宇治左大臣。保安元年（一一二〇）～保元元年（一一五六）七月一四日。※著書に『台記』

ラ

頼忠（よりただ）〔平安時代中期歌人〕延長二年（九二四）～永延三年（九八九）年六月二六日。摂政太政大臣実頼男。権大納言公任の父。勅撰集に『拾遺集』以下四首入集。
一二六八頁

おわりに

以上が、『和歌文学大辞典』や『新編国歌大観』等で来歴等が明らかかな人物と、『古今著聞集』に、話が収載された場合の巻数・タイトル・頁数をまとめたものである。ここにあげた歌人一覧を通観してみると、つぎの三点の共通項が浮かび上がってきた。

① 後白河院の親近者

② 『古今著聞集』に収載されている人物が三十五名、認められる。

③ 『栴葉和歌集』に入集し、なおかつ『古今著聞集』にも名前が確認できる人物において、生没年の最も早い人物は、能因で、

永延二年（九八八）～没年未詳。永承七年（一〇五二）までの生存が認められる。生没年の下限にあたる人物は、資季（すけすゑ）で、承元元年（一一二〇七）～正応二年（一一八九）一月二二日、八三歳となる。

特に②の結果は重要である。『栴葉和歌集』の詠者が、『古今著聞集』に三十五名登場するというのは、『古今著聞集』がその制作において、『栴葉和歌集』の作者の和歌や漢詩といった創作活動や弘

二十卷。

一二六八頁

* 35 『古今著聞集』

卷第二・五五話「宇治左府頼長定信入道を礼拝の事」九一頁

卷第三・九五話「左近将曹久季豊明節会に先づ膝突を敷きて外記を召す事」一一六頁

卷第三・九七話「宇治頼長最勝講の講読師座の立て様の僻説に依るを悔いて怠状を送る事」一一六頁

卷第四・一二四話「宇治左府頼長周易を学ぶ事」一三〇、一三一頁

卷第四・一二六話「宇治左府頼長院宣により学問料の試を行ふ事」一三一、一三二頁

卷第六・二七四話「宇治左府頼長の宿所并びに院の御所にて御遊の事」二三四頁

卷第八・三〇六話「宇治内大臣頼長師恩を重んずる事」二四五頁

卷第八・三〇八話「宇治左府頼長父忠実に寵愛せらるる事」二四五、二四六頁

卷第一〇・三七八話「宇治左府頼長の隨身公春が強力の事」三〇一頁

卷第十一・四一一話「賀茂神主家平二重鞠を見分くる事」三二八、三二九頁

卷第一六・五一〇話「藤原有盛宇治左府頼長に逢ひ装束を着用に及ばず周章下車の事」四〇五頁

卷第一六・五一二話「藏人判官範貞内覧の大臣頼長を見知らざる事」四〇六頁

事等の活動を収載した作品である、ということになる。松本麻子氏が、

素俊とほぼ同時代に、同じ藤原孝道に琵琶を習い、また橘姓で

同じく「季」の字を持つ人物に『古今著聞集』編者の橘成季が

いる。『古今著聞集』（二三三）には、素俊の説話が載り、また

『栴葉和歌集』の詞書と類似した内容が『古今著聞集』説話にも

共通して見られる。つまり、素俊と橘成季は姻戚関係にある

のではないかと考えられる。

と指摘されているが、このご指摘もその一端ということになる。

そこで『栴葉和歌集』歌人について、生没年や略歴を掲載し、さ

らに『古今著聞集』における活動を一覧にし、論文の末尾に掲載し

た。この表において重要な点は、生没年未詳とされた「聖信房」と

『栴葉和歌集』編者「素俊」である。

さらに③の結果から、両作品に登場する人物が、おおよそ、九八

八年から一二八九年の間において活躍していることになる。この

条件に關しても、正信房湛空の在世（一一七六～一二五三年）は、

条件に当てはまるのである。末尾の一覧表からも、両作品に登場す

る三十五名のうち、二十二名が和歌、漢詩、唱導といった創作の場

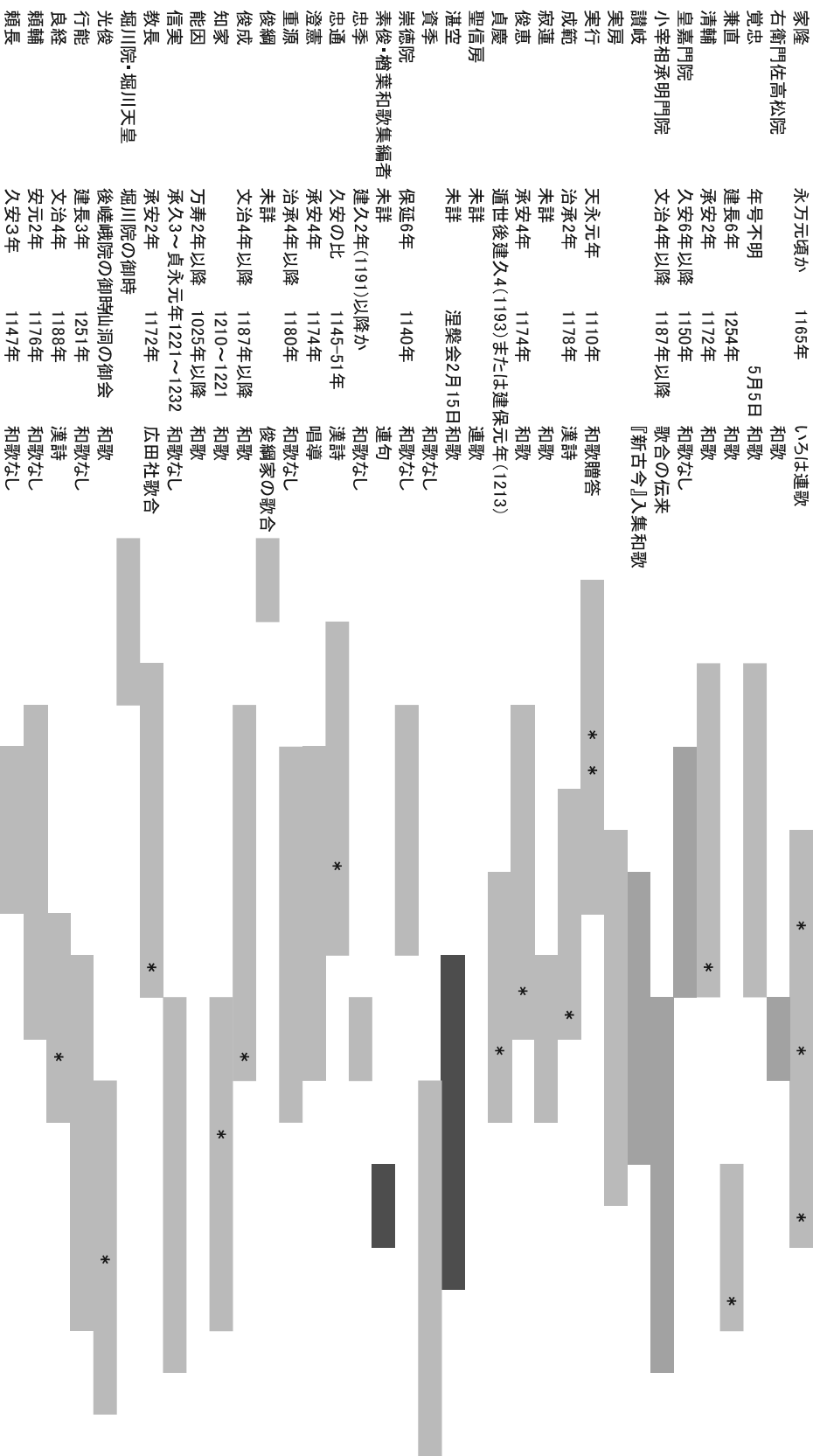
にあることも付言しておきたい。

以上のことを総合してみると、『栴葉和歌集』の聖信法師と、『古今著聞集』の聖信房が、同一人物である可能性が極めて高いものと結論できよう。

『古今著聞集』における『檜葉和歌集』歌人の活動

年号(西暦) 『古今著聞集』の説話の年号と内容

1080 1090 1100 1110 1120 1130 1140 1150 1160 1170 1180 1190 1200 1210 1220 1230 1240 1250 1260 1270 1280 1290



* 和歌または漢詩の歌作時期
 …男性 …女性
 …主要人物 (『法然上人伝法絵』作者、湛空。『檜葉和歌集』編者、素俊)

【注】

- (1) 拙稿、『法然上人伝法絵』の和歌と作者——『善導寺本』の表現を手がかりに——『仏教文化研究』第六三号、平成三十三年三月、掲載決定
- (2) 細川涼一訳注『感身学生記』、東洋文庫六六四、一九九九年、平凡社、八六頁。ならびに、細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、昭和六十二年)第四章「鎌倉時代の尼と尼寺——中宮寺・法華寺・道明寺——」において、詳細に論じられている。
- (3) 『天和古寺大観』第五卷「秋篠寺 法華寺 海龍王寺 不退寺」岩波書店、昭和五三年、一四〇～一四三頁
- (4) あらすじをまとめる上で、細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』(吉川弘文館、昭和六十二年)第四章「鎌倉時代の尼と尼寺——中宮寺・法華寺・道明寺——」一二一～一二四頁を参考にした。
- (5) (注3)と同じ、田中稔氏の解説による。
- (6) 法華寺の尼僧に関しては、(注4)細川氏の同書、一二四～一二五に詳しい。
- (7) 樋口芳麻呂『檜葉和歌集と研究』、未刊国文資料刊行会、昭和三十六年
- (8) (注7)と同じ、一九五～二〇五頁
- (9) 久保田淳氏「『檜葉和歌集』の歌人群一斑」、『文学』第一一卷第一号、岩波書店、平成二十二年一・二月号所収、五八～六四頁。平野多恵氏「寺院文化圏の釈教歌——『檜葉和歌集』を中

- 心に」、『国語国文』七七号、平成二〇年、二八～四五頁。松本麻子氏「鎌倉初期の連歌好士と奈良」、『青山語文』第三四号、平成一六年、三七～四六頁。加賀元子氏「檜葉和歌集覚書——宇智郡御霊社・良因寺・法隆寺蓮光院に関わって」、『武庫川国文』五七号、平成一三年、三五～四四頁。築瀬一雄氏「檜葉和歌集と俊恵法師」、『南都仏教』九号、八五～一〇三頁、昭和三十六年
- (10) (注9) 松本氏と同じ、四二頁
- (11) 田渕句美子『中世初期歌人の研究』笠間書院、平成一三年、三〇二頁
- (12) 拙稿注(1)と同じ、第五項「作者と阿闍梨尋玄」
- (13) 『和歌文学大辞典』編纂委員会編、『和歌文学大辞典』、古典ライブラリー、平成二六年。『新編国歌大観』監修、『新編国歌大観』DVD-ROM、角川書店、平成二四年。『国史大辞典』編纂委員会編、『国史大辞典』、吉川弘文館などを適宜、参考にした。